令和５年度　第１回　浜松市美術館協議会

日　時　令和５年８月２４日（木）
午前１０時から午前１２時まで
場　所　浜松市美術館　２階　講座室

次　　第

１　開　会

２　浜松市美術館協議会委員の委嘱書・任命書の交付

３　浜松市市民部文化振興担当部長あいさつ

４　浜松市美術館長あいさつ

５　美術館協議会委員自己紹介

６　美術館職員紹介

７　議　題
（１）会長の選出について
（２）会長職務代理者の指名について
（３）令和４年度浜松市美術館事業報告及び内部評価について
（４）その他

８　閉　会

浜松市美術館協議会委員名簿

No.	選出区分	氏　　名	経　歴　等
1	学識経験者	山口　剛	浜松美術協会理事 日本工芸会正会員
2	学識経験者	荒川　朋子	静岡文化芸術大学デザイン学部准教授
3	学識経験者	筧　有子	浜松学院大学 現代コミュニケーション学科准教授
4	学識経験者	内田　いず美	元浜松市教育研究会美術科研究部顧問校長
5	社会教育関係者	磯部　啓次	浜北文化協会副会長
6	社会教育関係者	石上　充代	静岡県立美術館学芸課長
7	学校教育関係者	今田　徹	浜松市立村櫛小学校長
8	学校教育関係者	伊藤　公子	浜松市立北浜東幼稚園長

令和4年度　浜松市美術館内部評価

基　本　理　念	
「明日への希望を見出す美術館」	・誰もが気軽に立ち寄れる憩いの美術館であることで、、美術との出会いの場を広げます。また、都市の拠点として国内外の優れた作品や地域ゆかりの作品雄鑑賞の機会、人々の参加・交流により市民が心豊かになる美術館を目指します。
年間の展覧会基本テーマ	総　　評
・令和4年度の、基本的な展覧会企画のテーマを「日本文化の変遷（近世から現代へ）」とした。	・「遠藤美香展」では、浜松ゆかりの現代作家を取り上げ、巨大なモノクロ木版で表現された作品の紹介を行った。表現は木版画であり、特に時代背景に特徴は無いが、江戸時代から繋がる表現を活用した現代版の繊細な木版画の世界を展示することができた。 ・「ハイジ展」では、日本の文化として世界からも注目を集めるアニメ文化の先駆けとなる展示を行うことができた。この企画では、日本の文化と海外の文化の捉え方の違いにも着目し、スイスの児童文学が日本のアニメーションに姿を変える中からの特徴も示すことができた。 ・戦国時代から江戸期の風俗を取り扱った「刀剣展」では、国指定重要文化財である刀剣を展示するとともに、本館が所蔵する浮世絵なども展示し、様々な視点からの時代の特徴を展示することができた。

①展覧会について

・優れた美術を鑑賞できる展覧会を開催し、来館者の裾野を広げます。

	展覧会名	開催日数（日） 目標（人）	実績（人）	達成率	満足度（満足・やや満足）	成果	改善点
平常展の開催について	青磁の美展 R4.10.15～12.4	44 20,000	10,204	51%	82%	・当館の東洋美術の一大コレクション「小杉惣市コレクション」の中から、青磁の名品を紹介した。 ・刀剣展に訪れた方を対象に、分野の異なる作品（中国の陶磁器）に触れる機会を提供し、美術の普及に努めた。 ・作品数を厳選し、展示に余裕を持たせることで、作品一点一点に集中しやすい展示となるよう心掛けた。 ・陶磁器の耐えられる範囲内で、なるべく展示室全体の照度を上げることで、作品本来の色や形を鑑賞できるようにした。（白色LED）	・第三展示室は建物の構造上最も奥にある為、気付かないお客様がしばしばみられた。これまで以上に分かりやすい導線表示と積極的なアナウンスが必要であると感じた。 ・各時代の名品を並べたものの個々の作品を紹介するに留まってしまった。今後は、作品研究を重視した解説の準備に注力していきたい。
	第70回市展 R5.2.14～3.15	26 5,000	4,265	85%	80%	・搬入から開幕日までの準備期間に余裕を持たせることで、同時作業を減らし入力等のミスを減らすことが出来た。 ・搬入日を団体と個人とで別日に設定したことで、混雑を緩和しスムーズに搬入することができた。団体受入れ作品を把握する事で返却もスムーズに対応できた。 ・目録・キャプション制作について、作品搬入日とは別にPC入力日を設けたり、校正日を複数日設けたりしたことで、間違いを無くすことができた。 ・大賞受賞作品を次年度の展覧会「北斎展」開催期間中に、通路のピクチャーレールを活用して来館者に披露したことで、より多くの人に作品を見てもらうことができた。 ・昨年度、審査の不満が多かった絵画部門について、審査員を増員し二人の先生にお願いしたことで、審査の公平性を確保した。 ・例年、作品の天地について分かりにくい作品があった事を受け、応募要項に”作品シート”の枠を設け、完成図を示してもらうようにした。	・応募要項について、日本語版のみしか作成しておらず、外国籍の方への配慮が不足していた。（外国籍の方から問い合わせ有り） ・今年度より新たに取り入れた応募要項の”作品シート”について、周知が不足しており応募者の7割が空欄であった。煩雑さと応募者の理解度を鑑みて次回展以降では廃止としたい。 ・応募要項の記入欄について、職業欄や法量など分かりにくいレイアウトとなっている為、改善していく必要性を感じた。 ・審査結果通知を全ての応募者へ送付していたが、チェック等の照合作業に例年大きく時間を費やしていたため、次回展覧会はHP及び美術館入口付近に掲示板を設置し、審査結果をお知らせする。

企画展の開催について	遠藤美香展 R4.4.22～6.19	51 5,000	4,454	89%	85%	浜松市出身の版画家・遠藤美香の作品を市民の方にお披露目できる良い機会となった。3m×5m程度の新作「みちびかれて」など浜松が誇る木版画作家の作品をお披露目し紹介できたと感じている。 また、教育普及として大人のみに関わらず子供に対しても「消しゴムハンコ講座」を行い、作家と市民とが触れ合える機会を設けることができた。その他にも、多くの小中学生を迎えての作家本人によるギャラリートークや担当学芸員主導による対話型鑑賞など行い遠藤作品の周知にも努めることができた。 当館は地元の作家を浜松から全国に発信していくとともに浜松市民にその存在や作品を深く知っていただくことを目指しており、この展覧会は十分手ごたえを感じた。 ・「遠藤美香展―ここに根をはれ―」の開催を記念して、浜松市美術館所蔵品による版画展を同時開催した。 ・仏教版画から浮世絵、大津絵、創作版画、新版画、現代の版画までを紹介し版画の歴史を辿りつつ、それぞれの様式や技法に注目し版画の魅力に迫った。 ・特に、創作版画の系譜については、遠藤美香展との同時開催を意識して静岡の地に流れる版画の系譜が遠藤美香作品にまで繋がっていることを示せるよう作品（作家）を選定した。 ・HPに掲載している収蔵品データベースから検索すると、現在展示中の作品を表示できるようにした。	本展の目標人数はおおむね達成できたと感じているが広報活動については改善の余地があると考える。今回、新聞広告やラジオ出演などを行い宣伝を行ってきたが継続的に周知する宣伝媒体がなかったように感じる。そのため、その場限りの宣伝となり集客になかなか結び付かなった。今後は継続的に会期中宣伝できる方策を模索していきたい。 ・個々の作品解説について、作家を紹介するに留まってしまった。今後は、作品研究を重視した解説の準備に注力していきたい。 ・版画の系譜展につては、遠藤美香展と同時開催という位置づけの為、やや広報活動が弱くなってしまった。
	ハイジ展 R4.7.9～9.11	62 30,000	16,287	54%	92%	来館者アンケートの回答者の7 割以上が女性であったことは、“ ハイジ” の物語が日本において、その受容の出発点から少女向けコンテンツと定義されたことの延長線上で理解される。また、とりわけ男女差別が激しい国としての日本にあって“ ハイジ” が特にアニメ版の放送以降、女性にとっての一種の逃避場所を提供したという先行研究を一定の範囲で裏づけるものだとも考えられる。来場者の反応からは、やはり1974 年のアニメ版こそが“ ハイジ” の世界への入り口になっていた人が多く、今回の展示が強烈になつかしさを喚起するものであったことが確認できた。その点は事前の予想通りであるが、文学方面を扱った1 階部分の展示への好意的な反応の多さは予想以上であった。来場者にとって、アニメ版以外の“ ハイジ” の展示に大きなスペースが割かれているのはけっしてネガティブな事態ではなく、初めて目にする新たな“ ハイジ” 像に触れることができた純粋な驚きや喜びが支配的であった。また、ハイジとクララの少女同士の友愛に焦点を合わせた戦前の受容から、ハイジとペーターで異性愛的な構図を表現する戦後の受容への移行といった歴史のダイナミズムにも、来場者の強い関心が向けられた。“ ハイジ” をめぐる現象の世界的な広がりを視野に入れつつ、国・地域や時代によって大きな差異を示す“ ハイジ” 像の多様性を浮き彫りにするという企画当初の意図は十全に達成されたと言える。 アニメーション部門の展示では、小田部羊一氏のハイジのキャラクターデザインの誕生の経過を追うとともに、テレビアニメシリーズ初となった海外へのロケハン、『ハイジ』で初めて導入されたレイアウトシステムを中心に制作工程を丹念に追うことで、アニメーション制作への理解を深めるとともに、制作者の仕事ぶりを伝え、いかにしてこのアニメが時代と空間を越える存在となったかを明らかにしようと試みたが、来場者の反応やSNS の投稿からは、概ね、その目的を達成できたのではないかと考えられる。また、制作当時、その制作資料は文化財と見なされることはなく、ごく一部の愛好家の手に渡ったか、熱心な制作者自身が資料として保管していたものが奇跡的に残されていたもので、今から40 年以上前に制作された『ハイジ』では、すでに資料は散逸し、その所在自体を知ることが困難であったが、今回の展示準備を通じ、その所在に関する情報の集約が、一定程度進んだことは大きな成果といえよう。	SNS 上でも要望する声があった、今回あまり詳細に取り上げることができなかった（実は非常に数多く存在している）実写映画版や、典型的に「かわいい」キャラクターとして以外の“ ハイジ” 像の存在なども含め、より広い視野で“ ハイジ” 現象を捉えていくのが今後の課題である。 今回の展示ではハイジの「日本から世界への広がり」を示す上で、日本語版とドイツ語版のアニメの比較映像の上映や、「音楽の街・浜松」での展覧会に相応い音楽面での展示の一層の充実も目指したが、いずれも著作権の問題で実現できなかった。アニメーションは映像作品であり、音声や音楽はその一部なだけでなく、来場者に作品世界を想起させる重要なトリガーともなる。これは本展に限ったことではないが、著作権保護の重要性を鑑みつつも、公共性の高い美術展での利用などについて、わかりやすく、利用しやすい制度設計が待たれる。また、アニメーションのセル画は光と熱に非常に弱く、長期間の展示になる場合は作品保護の観点から、そのノウハウの確立と蓄積、共有が課題となっていくだろう。さらに、もう1 点付け加えるならば、『ハイジ』は、コンテンツツーリズムの言わば先駆けとなった作品であるが、この点については図録においては山村高淑氏（北海道大学）の寄稿により触れることができたが、今回の展示ではスペースの限りもあり十分紹介できなかったことが惜しまれる。 ギャラリートークの回数増、トークショーや講演会のオンライン配信、音声ガイドの用意等、展示内容の理解を促す多様なコンテンツの充実を求める声が多数よせられている。これらについては、今後、予算面、ソフトとハードの両面から対応策を検討していく必要がある。しかし、裏を返せば、ハイジ展がそれだけ「展示内容をより詳しく知りたい」という来館者の学習欲求を掻き立てた展覧会であったともいえる。こうした来館者の前向きな要望に順次応えられるよう検討を重ねていきたい。
	刀剣展 R4.10.15～12.4	44 20,000	10,204	51%	82%	栃木県二荒山神社の太刀など、普段は神社外に貸出しを行わない作品を、浜松で紹介し、来館者に喜んでいただくことが出来た。また、刀は難解な専門用語を用いて解説するのが常であり、一般のお客様が理解をすることは難しい。そのため、誰もが理解できる言葉を使用して、解説を示した。 さらに、刀は姿の美しさとともに、「煮え」や「におい」などの地鉄や波紋の状態を鑑賞することが醍醐味であるが、一見してそれらを確認すうることは困難である。観覧のお客様がこれらの現象を見やすいように、刀の展示角度を工夫して、パネルで図解した。	展示パネルの文字が小さく、お客様から読みにくいとのご指摘をうけた。次回からは的確な文字の大きさを心掛けたい。 本展覧会は「三方ヶ原の戦い450年」を記念した展覧会であったが、三方ヶ原の戦いに関係する展示が乏しかった。重要文化財の名刀を紹介した一方で、静岡県のゆかりの刀は1振りのみの展示であったため、地元の刀剣分野の研究がおろそかになってしまった。今後の課題である。

②教育普及活動について

・市民の感性を育むため、美術に触れる機会と他者とのつながりを提供します。

	内容	実績（人）	成果	改善点
団体鑑賞について	学校、地域の諸施設等からの団体での来館・鑑賞を受け付ける。	586	・遠藤美香展では学芸高校の美術課の生徒を招いて、作家によるギャラリートークを行った。学芸高校は作家の出身校でもあるため、先輩の生の声を聞けてとても有意義だったという意見が多かった。中でも版画の技法やコンセプトの創出方法など創作に関わる点のアドバイスを具体的に後輩に伝える場となったことは成果だと感じる。この出会いが未来の作家を生み出すきっかけになったと感じることができた。 ・ハイジ展では、ハイジ展では、中学生を対象にワークシートを活用し、世界のハイジ、日本のハイジ、アニメハイジのそれぞれのよさを造形的な視点から見出したり、自分なりのハイジ像を考え、実際に図像に表す活動を行った。展示の構成を生かしながら活動カスタマイズし、知識の一方的な伝達によらない、作品や友達との対話を通した思考力・判断力・表現力等の育成に重点を置いた活動が実施することができた。 ・刀剣展では、浜松市教育センターと連携し、初任者研修に参加する教員の団体鑑賞を受け入れた。	・今回は1校のみであったが複数校できればよかったと感じる左記の成果は美術館としても多く生み出していかなければいけないと感じる。そのため広報活動を工夫し多くの学校が参加できるよう周知していくことが必要だと考える。 ・ミライム（教育委員会系統のネットワーク）を用いて、各展覧会の概要と見どころ、学習指導要領（図工・美術、社会、総合、特活等）の関連する記述についも併記し、周知している。しかし、依然コロナ禍であり、学校団体の利用は伸び悩んだ。 ・各校の要望や活動のねらいに応じて柔軟に教育普及プログラムをカスタマイズすること、教員対象の研修の機会を創出することで、より多くの団体が美術館を利用し、豊かな学びを具現しているけるようサポートしていきたい。
ギャラリートークについて	展覧会担当学芸員や作家、監修者、専門家等が、展示内容について解説を行う。	291	・遠藤美香展では主に中学校からの依頼が多く、そのすべてが「対話型鑑賞」を行ってほしいという希望だった。そのため、生徒に作品について解説するのではなく、「どのように感じるのか」とか「どの作品が好きか」という問いを与え、それについて話し合わせる内容で行った。生徒が「思い」や「理由」を思考する際に手助けとして作品ついて解説したりアドバイスしていった。その中で、生徒一人一人が作品に対して価値を見出し他の生徒と共有することができたのは大きな成果である。地元の作家を周知することができた ・コロナ禍であったが、多くの来館者にギャラリートークを聞いていただくことができた。ハイジ展では当初学芸員によるギャラリートークを2回開催予定だったが、監修者の来館にともない、川島隆氏（京都大学）、ちばかおり氏（スタジオジブリ）によるギャラリートークを緊急開催した。学芸員のトークは広く浅く来館者に楽しく展示内容を理解してもらうことを重視し、ゲストによるトークはより専門的見地からの内容を伝えることができ、差別化が図られた。ちば氏のトークは森本茂氏（アトリエローク）との対話型で進行する等、新たな試みにも挑戦している。 ・刀剣展では、学芸員と森嶋定雄氏（熱田神宮刀剣保存会）との対話形式で行い、好評を博した。	・対話型鑑賞はその性質上、展示室で作品を前に活動する方が有効だと考える。ただ他のお客様に配慮ができなくなる可能性も秘めている。この点を鑑みて活動の時間や内容を精査していく必要がある。 ・アフターコロナを見据え、来館者が望む対面式のトークイベントをより多く設定していく。また、音声ガイドの制作、子供向け解説の設置等、ギャラリートークができない状況でも、来館者に展示をより分かりやすく伝える手立てを講じたい。 ・専門家との対話型のギャラリートークは、事前の役割分担や共通理解等、打ち合わせやすり合わせに時間を要する。よりよい方法を模索したい。
講演会について	展覧会担当学芸員や作家、監修者、専門家等が、展示内容について関連する講演（トークイベント）を行う。	122	遠藤美香展では、遠藤氏の出身高校である浜松学芸高校の生徒を招待し、遠藤氏から作家活動について講演をいただいた。 ハイジ展では、文学とアニメーションの両側面から、制作者や研究者を招いた講演会を開催した。講師の知名度もあり、両イベントとも予定人数を超える参加希望があった。アニメーションに関する特にアニメハイジ作画監督・小田部氏と担当プロデューサー中島氏の講演は、スイスへのロケハン、多忙を極めた制作現場、放映後の反応等、監督の高畑勲、場面構成の宮崎駿とのエピソード等、本人からしか聞けない内容が盛りだくさんで、一般市民はもちろん、著名なアニメーション関係者からも好評を博した。なお、中島氏はこのイベントの翌月に亡くなられており、本講演がアニメハイジ制作について公に語る最後の場面となった。	美術館の講座室では収容人数に限りがあり、参加の希望が叶わない来館者が出てきてしまう。内容によっては市の施設を借りての講演会開催も検討したい。その際、展覧会を観る機会と講演を聴く機会のバランスを考慮した日時設定、会場の選定が必要である。
ワークショップについて	展覧会の内容に応じた表現活動・鑑賞活動を行う。	73	遠藤美香展で、「消しゴムハンコ講座」を開設した。子供と大人の部に分け難易度を変えて実施した。講師には作家を迎え彫り方や摺り方などを中心に説明を行い、参加者が思い思いに消しゴムハンコを制作していく内容である。難易度を分けたことによりどの世代も、難しくもなく簡単でもない下絵に苦戦しながらも挑戦する姿が見られた。また、時間内に完成しない場合でもご自宅で再度続きができるシステムにしたためとても好評であった。最後に希望者には作家との集合写真の時間を設け、多くのお客様が作家と触れ合えた時間となった。けが人も出ず無事に終了することができた。	下絵の難易度をもう少し細かく分類できたらよかったと感じる。子供向けの下絵では小学校高学年から中学生ぐらいがちょうどよいと感じる難易度にしたため、幼児の保護者が終始制作と子どもの面倒の両方をしなければならない姿が見られた。講座の内容を再度検証する必要があると感じた。
出前講座について	大学、教員研修、市民講座やカルチャーセンター等に出向き、美術館や所蔵品、開催する展覧会等について講演し、その魅力を広く周知する。	160	今年度は教員を目指す学生（聖隷クリストファー大学）、市内の若手経営者（浜松青年会議所）、美術専門のの学生（静岡大学）、浜松市に新規採用された小中学校の教員（浜松市教育センター）を対象に、それぞれ美術館の活動や展覧会について講義を実施した。学生や若い世代、その層に合った内容でアプローチすることが、美術館や地域の芸術・文化を身近に感じてもらうきっかけとなるものと考える。今後も積極的なアウトリーチ活動を続けていきたい。	聖隷大学、静岡大学との連携は3～5年間継続できている。文化芸術大学、浜松学院大学との連携も数年おきに実施している。あくまで大学側からのオファーがあればというスタンスであるため、大学との連携の機会が保証されているわけではない。今後はシステマティックな連携体制の構築も視野に入れたいところである。教育センターの初任者研修は、来年度の継続実施が決まっている。プラスして、展示内容に応じた独自の教員研修の開催も模索していく。
体験活動受入について	浜松市内の中学生に美術館業務を体験させたり、学芸員取得を目指す大学生の博物館実習、インターンシップの大学生を受け入れ、学芸業務や行政事務を体験させたりする。	7	（職場体験） 本年度は2校が職場体験を行った。内容は監視業務と物販販売業務を行ってもらい最後に担当からの質疑応答という形で2日間実施した。どちらの生徒も真面目に業務を行い「お客様への対応の難しさ」や「展覧会開催するにあたっての苦労」などを知ることができたという感想を言ってくれた。なかなか美術館の業務を他の人に知ってもらう機会がない中で今回のような活動ができたのは大きな成果だと感じる。 （博物館実習） 作品の取り扱いや展覧会企画等を体験的に学び、最終課題の模擬展示を完成し、来館者にお披露目した。 （インターンシップ） 施設の維持管理、誘客方法などについて対話し、具体的な方法を検討したり、発表したりした。	・館の目標に沿った活動ができたと感じる。永続的に実施できるよう個々の内容をブラッシュアップしていきたい。 ・博物館実習、インターンシップでは、可能な限り生の現場や社会に触れる機会、思考・判断・表現の機会を可能な限り多く設定したするよう活動内容の編成に配慮したが、学ぶべき内容や時間の都合上で、座学も多くなってしまう現状がある。

③その他施設等について

・様々な人に開かれた美術館とし、施設・設備の充実と健全運営を目指します。

来場者アンケート～　満足度について	アンケートは遠藤美香展、ハイジ展、刀剣展、市展で実施。
スタッフ対応　　「満足」、「やや満足」と回答したものを計上。	72%
施設満足度　　「満足」、「やや満足」と回答したものを計上。	74%
施設に臨むもの	①カフェ 60%17%　②常設展示室 17%　③収蔵品検索コーナー 13%　④その他 10%
施設の状況について	
浜松市美術館ドア修繕工事、浜松市美術館LAN配線工事、浜松市美術館自動ドア施錠取替工事、浜松市美術館女子トイレ照明工事、浜松市美術館自動ドア装置修繕工事 浜松市美術館女子トイレ便座工事、浜松市美術館火災報知器修繕工事、浜松市美術館多目的トイレ工事、2階展示ケースフィルム張替修繕工事、配線ダクト工事、ガラスフィルム取替工事	
展覧会等の情報発信について	
・展覧会毎にポスター掲示やチラシを配布したほか、展覧会共催者によるテレビCM等を活用した情報発信を行った。ハイジ展・刀剣展については、テレビCMによる広報の効果が大きく感じられた。	
・ポスターは広告媒体の重要のものとなることから、デザインを決める際には担当だけでなく全職員で見やすさやデザインの観点から決定した。	
・SNSを活用した情報拡散　若年層を取り込むにはツイッターやFacebookが有効と考える。企画会社や作品の借用先と交渉し、来館者にはなるべく作品撮影の機会を与えるようにしている。 館内にはツイッターやFacebook、インスタグラムのQRコードを掲示して容易にアクセスしやすくしている。	
・ツイッターを利用した情報発信　ツイッターでは若年層に興味をもってもらうように柔らかい表現で情報発信している。近年のフォロワー数の伸びも著しい。（参考：8/5　現在のフォロワー数9,152）	